

都道府県別賞一等

生命保険でつながる「輪」

富山県 射水市立小杉南中学校 二年生

境 公士朗

「何かあっても大学までは行けるからね。」

母はしきりにこのように言う。僕は当たり前のように勉強し、当たり前のように部活に取り組み、当たり前のように生活してきた。しかし、いざその「何か」が起こったときを考えると不安になる。すると母は続けてこう言う。

「学資準備のための保険に入っとるから安心して。」

そのとき、母の言った保険の存在が気にかかった。保険は命に関わる大切なものだけれど難しいものであるという印象があり、これまで保険と真剣に向き合ったことはなかった。しかし、僕自身が生活していく中において、保険と密接な関係にあるという事実を知り、保険に対して親近感を覚えた。同時に、保険のことをしっかりと理解しておくことが必要だと思った。

僕が被保険者となっている学資準備のための保険も生命保険の一種だ。保険とは、公平にお金を出し合い、いざというときに給付を受けるしくみのこと。つまり、有事が起これない限り、保険が下りることはないということだ。だったら保険に入る必要はないのではないか。僕はそう思った。ところが母は、「何か起きてからでは遅いからと、お父さんが加入したんよ。安心して勉強に専念できる、お守りやと思っただけ。」

と、笑顔で言った。このとき僕は、率直にうれしかった。そして、何より僕のことを考えて保険に加入してくれていた家族のことを思うと胸がいっぱいになった。

生命保険は万が一の事態への備えを万全にでき、なおかつ、不安感を払拭し、安心感を得ることができ、*「幸せへの鍵」*である。そしてその、*「幸せへの鍵」*をもつた皆さんの人々が集まり、社会の中で一つの輪をつくっているように思う。なぜなら、生命保険を通じて、人と人との支え合いが生まれているからである。人は一人で生きていくことなどできない。支払ったお金が誰かの役に立ち、自分が困ったときには手を差し伸べてくれる。それが、生命保険の中の思いやりであると気付いた。このような枠組みが、自分から見ると一つの輪のように、みんなが生命保険でつながっているようにうつつた。仮に生命保険に加入することが自分のためにならなかったとしても、必ずどこかで人の役に立っているんだと、保険への考え方が変わった。

また、保険は将来への投資であるとも思う。子供のころは学資準備のための

第54回中学生作文コンクール

保険、大人になったときの医療保険や介護保険、そして老後の生活に向けた個人年金保険と、まるで、未来のことを考えた先行投資であるかのように見える。

母の何気ない一言から始まった生命保険への興味は、僕の保険への意識を変え、家族の思いを知ることにつながった。今回学んだたくさんさんの知識を今後、社会の中でどのように生かしていけばよいか、考えるきっかけとなった。今は、家族に守られ、養われて生活している自分だが、いずれは逆の立場になると思う。そんなとき、いかにして家族を支えていくのか。まだまだ先の話だと思っていたけれど、生命保険の視点から見ると、あつという間のことである。

生まれた瞬間から亡くなる瞬間まで、長く長くお世話になるものだから、しっかりと考えて保険に加入したいと強く感じた。

「立派な社会人になってほしい。」

その家族の願いを、保険に込められた思いを踏みにじることにならないように勉強に励んでいきたいと思う。

これまで当たり前のように思ってきた様々なことが「感謝」に変わった。健康で生活できることに感謝し、学ぶことができる環境に感謝し、そして、ここまで産み育ててくれた両親と家族に、改めて感謝したい。ありがとう。